

大学生の時間的展望と社会人基礎力

—時間的展望のタイプによる検討—

奥田 雄一郎

キーワード

大学生 時間的展望 高等教育 社会人基礎力 汎用的技能 (Generic Skills)

要旨

本研究は、時間的展望の視点から大学生の社会人基礎力を検討したものである。社会人基礎力とは経済産業省（2006）によって提案された「組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」であり、3領域12項目から成る。本研究においては独立変数として、1) 時間的展望体験尺度(白井, 1994), 2) 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) (下島ら, 2011) の2種類の尺度、従属変数として、1) 社会人基礎力尺度(北島ら, 2011), 2) 大学生の汎用的技能 (Generic Skills) 尺度(山田ら, 2010) の2種類の尺度を用い、大学生らが過去・現在・未来に対してどのような展望を抱くのかという時間的展望のタイプによって、大学生らに身につけている社会人基礎力がどのように異なるのかを検討した。その結果、時間的展望体験尺度で3クラスター、日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) においては4クラスターが得られた。両尺度において現在に対する満足度は低いものの未来に対しての指向は高い「現状不満足群」(時間的展望体験尺度)と「現在準備群」(日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI))が、他の群に比べて社会人基礎力が高いことが明らかにされた。

1. 問題と目的

近年、大学生の様々な「力」の可視化と高等教育への活用が進められている。文部科学省による「学士力」や「就業力」、経済産業省による「社会人基礎力」、成績を数値化した GPA (Grade Point Average) など、現代においては大学生の様々な側面が“数値化”され、“測定”され、“可視化”されている。

こうした“大学生の「力」の可視化と活用”の背景となっているのは、第一に、大学設置基準大綱化以降の大学の増加と、それに伴う大学全入時代によって引き起こされたと言われる大学生の学力低下が社会問題化されたこと、第二に、大学に入学できさえすれば自動的にホワイトカラーの職へ就くことができるというパイプライン・システムが崩壊し(山田, 2004)、バブル崩壊後の経済状況から大学から社会への移行が困難となり、ニートやフリーターといった若者の就業が社会問題化されたことの2点があげられる(奥田, 2011b)。

第一の「大学生の学力低下」という問題に対し、文部科学省は大学教育における質の保障の為の指針として、大学卒業までに学生が最低限身につけなければならない能力を「学士力」と定義した（文部科学省中央教育審議会，2008）。学士力は4領域13項目から成る。第一の領域は「知識・理解」であり，多文化・異文化に関する知識の理解，人類の文化，社会と自然に関する知識の理解の2項目から構成される。第二の領域は「汎用的技能」でありコミュニケーションスキル，数量的スキル，情報リテラシー，論理的思考力，問題解決力の5項目から構成される。第三の領域は「態度・志向性」であり，自己管理力，チームワーク，リーダーシップ，倫理観，市民としての社会的責任，生涯学習力から構成される。第四の領域は「統合的な学習経験と創造的思考力」であり，獲得した知識・技能・態度などを総合的に活用し，自らが建てた新たな課題にそれらを適用し，その課題を解決する能力から構成されている。



Figure1 社会人基礎力

<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/pr1.ppt>

第二の「大学生の就業の問題」は，日本経済団体連合会(2004)による「与えられた知識だけに頼るのではなく，物事の本質をつかみ，課題を設定し，自ら行動することによってその課題を解決していける人材を育成することが急がれる」といった提言に見られるように，学生を受け入れる側の社会のニーズの高まりによるところが大きい。経済産業省（2006）は，こうした社会からのニーズに

対し「組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」として「社会人基礎力」という概念を打ち出した。社会人基礎力は3領域12項目から成る。第一の領域は「前に踏み出す力（アクション）」であり，主体性，働きかけ力，実行力の3項目から構成される。第二の領域は「考え抜く力（シンキング）」であり，課題発見力，計画力，創造力の3項目から構成される。第三の領域は「チームで働く力（チームワーク）」であり，発信力，傾聴力，柔軟性，状況把握力，規律性，ストレスコントロール力の6項目から構成される。こうした社会人基礎力育成の必要性という提言を受け，近年では様々な領域において社会人基礎力育成の為の実践が行われている。例えば空間デザインのグループワーク（手嶋，2013），映像制作実習（真島，2013），法律討論会（長屋ら，2012），ファッションショー（花田ら，2012），インターンシップ体験（北岡ら，2008；大田・高中，2011・2012），キャンプ体験（築山ら，2008；青木ら，2012），商品開発（頭師，2010）など，様々な体験を通した社会人基礎力の育成についての研究が行われている。

こうした社会人基礎力は、単に大学におけるカリキュラムといった時間の中のみで捉えるのではなく、大学生らの過去・現在・未来といった時間的展望との関連という視点から捉えられるべきである。なぜなら、例えば文部科学省（2004）が職業的（進路）発達にかかわる諸能力として「人間関係形成能力」，「情報活用能力」，「意思決定能力」などの現代における社会人基礎力に相当する「力」に加え「将来設計能力」を提起しているように、社会人基礎力は学生時代という生涯発達における一定の時間に閉じたものではなく、大学卒業後の未来との関連といった時間的展望の中で捉えていく必要があるからである。

時間的展望とは、Lewin(1951)によれば「ある一定時点における個人の心理学的過去、および未来についての見解の総体」と定義されている。これまで、心理学における大学生の時間的展望研究においては時間的展望とアイデンティティ（都筑，1993），時間的展望と動機づけ（白井，1995）といったように多くの変数との関連が研究され、様々な知見が蓄積されてきた（都筑・白井，2007）。しかしながら、それらの時間的展望研究の知見を用いて高等教育の中で大学生の時間的展望をどのように育てるか、時間的展望の発達が大学生らの学びにどのように関連しているのかといった実践的・教育的な視点からのアプローチはこれまで少なかった。

高等教育において、大学生自身が自らの過去や現在をどのようなものとして意味づけ、そして自らの未来を展望していくのかを明らかにするだけではなく、そうした大学生の時間的展望をどのように支援するのかが重要な問題である。こうした視点から、奥田(2009, 2010, 2011a)においては、高等教育における演習という学習過程を対象とした質的な検討を行ってきた。それに対して本研究においては質問紙調査を用いた大規模調査を行うことによって、大学生における時間的展望と社会人基礎力との関連を量的な側面から検討する。

以上のことから本研究の目的は、自らの過去・現在・未来に対してどのような展望を抱くのかという時間的展望のタイプによって、大学生らに身につけている社会人基礎力がどのように異なるのかを明らかにすることである。

2. 方法

関東近辺の4大学の大学生357名(男性125名，女性229名，不明3名：1年生91名，2年生127名，3年生94名，4年生40名)に対して、以下の4つの尺度から成る質問紙調査を行った。

大学生の時間的展望を測定する尺度として、本研究においては1) 時間的展望体験尺度(白井，1994)，2) 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) (下島ら，2011) の2種類の尺度を用いた。

時間的展望体験尺度は18項目：5段階評定であり、将来の目標があるかといった【目標指向性】，自分の将来に希望が持てるかといった【希望】，現在の生活が充実しているかといった【現在の充実感】，過去を受け入れることができるかといった【過去受容】の4つの下位因子から構成されている。

日本版 ZTPI は 43 項目：5 段階評定であり、人生の中で、ああすべきだったのと思うことが多いといった【過去否定】、やるべきことがある時、誘惑に耐えることができるといった【未来】、楽しかった思い出がすぐに心に浮かぶといった【過去肯定】、人生に刺激は重要だといった【現在快樂】、人生の進路は自分ではどうしようもない力によって決められているといった【現在運命】の 5 つの下位因子から構成されている。

時間的展望体験尺度と日本版 ZTPI は同じ時間的展望という概念を測定する尺度ではあるが、時間的展望体験尺度が目標指向性や希望といった未来の側面をより重視した尺度であるのに対して、日本版 ZTPI はむしろ過去と現在の側面を重視しているなどの差異がある。

大学生の社会人基礎力を測定する尺度として、本研究においては 1) 社会人基礎力尺度(北島ら, 2011), 2) 大学生の汎用的技能 (Generic Skills) 尺度 (山田ら, 2010) の 2 種類の尺度を用いた。

社会人基礎力尺度は、36 項目：6 段階評定であり、自分の役割や課題に対して自発的自立的に行動しているといった【主体性】、グループの目標を達成するために積極的にメンバーに働きかけているといった【働きかけ力】、目標達成に向かって粘り強く取り組み続けているといった【実行力】、目標達成のために現段階での課題を的確に把握しているといった【課題発見力】、目標達成までの計画と実際の進み具合の違いに留意しているといった【計画力】、従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出しているといった【創造力】、話そうとすることを自分なりに理解したうえでメンバーに伝えているなどの【発信力】、相槌や共感等により、メンバーに話しやすい状況を作っているといった【傾聴力】、立場の異なるメンバーの背景や事情を理解しているといった【柔軟性】、周囲の人間関係や忙しさを把握し、状況に配慮した行動をとっているといった【状況把握力】、規律や礼儀が特に求められる場面では、礼節を守ったふるまいをしているといった【規律性】、人に相談したり、支援を受けたりして、ストレスを緩和しているといった【ストレスコントロール力】の 12 の下位因子から構成されており、さらに、【主体性】、【働きかけ力】、【実行力】をまとめたアクション、【課題発見力】、【計画力】、【創造力】をまとめたシンキング、【発信力】、【傾聴力】、【柔軟性】、【状況把握力】、【規律性】、【ストレスコントロール力】をまとめたチームワークの 3 領域にまとめることができる。

大学生の汎用的技能 (Generic Skills) 尺度は 35 項目：5 件法であり、ものごとを批判的・多面的に考える力といった【批判的思考・問題解決力】、他人と協調・協働して行動することといった【社会的関係形成力】、社会の発展のために積極的に関与することといった【持続的学習・社会参画力】、多文化や異文化に関する知識の体系的な理解といった【知識の体系的理解力】、多様な情報を適正に判断し、効果的に活用する力といった【情報リテラシー】、特定の外国語で聞き、話す力といった【外国語運用能力】、社会生活において母語（日本語など）で読み、書く力といった【母語運用能力】、自分の意見を筋道立てて主張できる力といった【自己主張力】の 8 つの下位因子から構成されている。

3. 結果

3-1. 時間的展望体験尺度のクラスター分析

時間的展望体験尺度の標準化した因子得点をクラスター分析（Ward 法）によって分類した結果，解釈可能性により以下の 3 つの群が抽出された．以下に各群の特徴を示す．

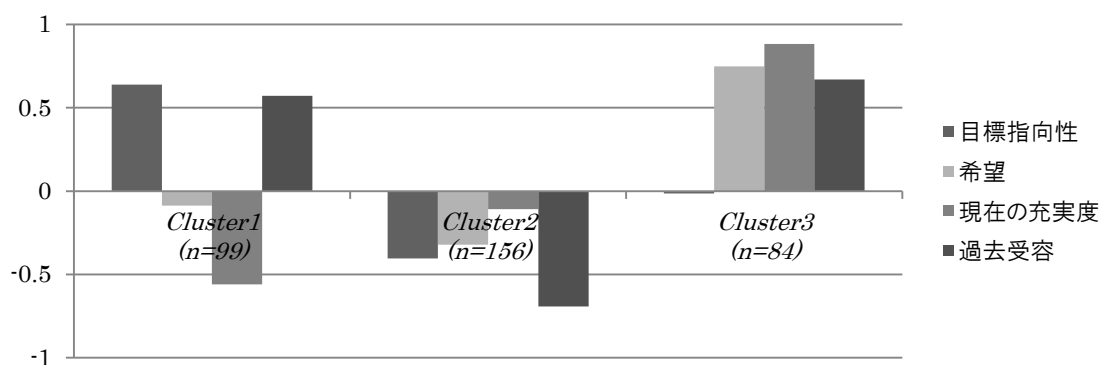


Figure2 時間的展望体験尺度のクラスター分析結果(Ward 法)

Cluster1 は，目標指向性因子と過去受容因子の得点が高く現在の充実度が低い，つまりこれまでの過去に対する満足度は高く，将来に対しても希望は持てないながらも自らの将来に向けて努力しているが，そうした現状に対して満足することはない大学生たちであり，この群を「現状不満足群」（ $n=99$ ）とした．Cluster2 は，目標指向性因子・希望因子，現在の充実度因子，過去受容因子の全ての得点が低い，つまりこれまでの過去にも，この先の未来にも，そして現状に対しても満足することができていない大学生たちであり，この群を「展望停滞群」（ $n=156$ ）とした．Cluster3 は，目標指向性因子が低い一方で，希望因子，現在の充実度，過去受容因子得点が高い．つまり将来の目標は持てないが希望は在るといったように楽観的で，これまでの過去や現状には満足している大学生たちであり，この群を「楽観展望群」（ $n=84$ ）とした．

なお，本研究においては奥田（2009）とは異なるクラスター分布が見られた．奥田（2009）においては，未来への目標志向性・希望因子得点の高い高展望群，未来への目標志向性・希望因子得点が低い低展望群，その間の中展望群というクラスター分布が見られたが，本研究においては希望因子が現在の充実度因子や過去受容因子と関係していた．また，「将来に目標がある」といった項目から構成される目標志向性因子の高い大学生たちが，自らの将来に希望は持てず，現状への満足が低いといった得点分布は従来の研究では見られなかった．従来の時間的展望研究においては目標志向性と希望因子は相関が高く，因子分析の結果一つの因子とみなされることもあった（大石・岡本，2010）．しかしながら現代社会においては，多くの論者によって若者が未来を展望しにくい，希望が持ちにくいことが指摘されている（浅野，2006；古市，2011；宇野・濱野，2012）．そうした時代的な影響が，本研究におけるクラスターの分布に現れている可能性が示唆された．

3-2.時間的展望体験尺度による社会人基礎力の検討

クラスター分析によって抽出された、現状不満足群、展望停滞群、楽観展望群の3群を独立変数とし、社会人基礎力を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、アクション、シンキングに相当する因子において各群の間に有意な差が見られ、チームワーク因子においては群間に有意な差は見られなかった。

Table1 時間的展望体験尺度と社会人基礎力との関連（多重比較：Tukey 法）

	C1:現状不満足群 (<i>n</i> =99:29.20%)	C2:展望停滞群 (<i>n</i> =156:46.02%)	C3:楽観展望群 (<i>n</i> =84:24.78%)	F値 (2,336)	多重比較
アクション	4.07 (0.88)	3.78 (0.77)	3.66 (0.85)	5.99 **	1>2・3
シンキング	3.93 (0.80)	3.57 (0.77)	3.57 (0.84)	7.10 ***	1>2・3
チームワーク	4.24 (0.68)	4.06 (0.66)	4.07 (0.72)	2.40	

p*<.05 *p*<.01 ****p*<.001

Table2 時間的展望体験尺度と社会人基礎力との関連（各因子）（多重比較：Tukey 法）

	C1:現状不満足群 (<i>n</i> =99:29.20%)	C2:展望停滞群 (<i>n</i> =156:46.02%)	C3:楽観展望群 (<i>n</i> =84:24.78%)	F値 (2,336)	多重比較
主体性	4.01 (0.98)	3.81 (0.83)	3.69 (0.88)	3.16 *	1>3
働きかけ力	4.02 (1.03)	3.70 (0.95)	3.65 (0.96)	4.16 *	1>2・3
実行力	4.13 (1.01)	3.84 (0.87)	3.65 (0.98)	6.14 ***	1>2・3
課題発見力	4.13 (0.78)	3.82 (0.79)	3.80 (0.92)	5.15 ***	1>2・3
計画力	3.87 (0.99)	3.52 (0.95)	3.49 (0.98)	4.62 *	1>2・3
創造力	3.81 (1.00)	3.37 (0.98)	3.43 (0.96)	6.38 ***	1>2・3
発信力	4.03 (0.91)	3.74 (0.87)	3.76 (0.85)	3.58 *	1>2
傾聴力	4.23 (0.86)	4.08 (0.81)	4.06 (0.89)	1.11	
柔軟性	4.25 (0.91)	4.12 (0.86)	4.16 (0.91)	0.67	
状況把握力	4.23 (0.95)	3.92 (0.86)	3.96 (0.89)	3.72 *	1>2
規律性	4.64 (0.88)	4.52 (0.90)	4.55 (0.85)	0.53	
ストレスコントロール力	4.12 (1.02)	3.93 (1.01)	3.93 (1.09)	1.14	

p*<.05 *p*<.01 ****p*<.001

また、社会人基礎力の3領域であるアクション、シンキング、チームワークを構成する項目12因子を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、主体性、働きかけ力、実行力、課題発見力、計画力、創造力、発信力、状況把握力の因子において、楽観展望群に比べて現状不満足群、あるいは楽観展望群と展望停滞群に比べて現状不満足群が社会人基礎力に関する得点が有意に高かった。

3-3.時間的展望体験尺度による大学生の汎用的技能（Generic Skills）の検討

クラスター分析によって抽出された、現状不満足群、展望停滞群、楽観展望群の3群を独立変数とし、大学生の汎用的技能（Generic Skills）を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、非判的思考・問題解決力、持続的学習・社会参画力、母国語運用力、自己主張力において、展望停滞群、楽観展望群に比べて現状不満足群の汎用的技能（Generic Skills）に関する得点が有意に高かった。

Table3 時間的展望体験尺度と汎用的技能 (Generic Skills) との関連 (多重比較: Tukey 法)

	C1:現状不満足群 (<i>n</i> =99:29.20%)	C2:展望停滞群 (<i>n</i> =156:46.02%)	C3:楽観展望群 (<i>n</i> =84:24.78%)	F値 (2,336)	多重比較
批判的思考問題解決力	2.94 (0.45)	2.77 (0.44)	2.74 (0.50)	5.42 *	1>2・3
社会的関係形成力	3.17 (0.46)	3.14 (0.46)	3.04 (0.49)	1.75	
持続的学習社会参画力	2.94 (0.53)	2.74 (0.57)	2.66 (0.53)	6.39 **	1>2・3
知識の体系的理解力	2.68 (0.56)	2.62 (0.53)	2.55 (0.51)	1.36	
情報リテラシー	3.27 (0.59)	3.26 (0.61)	3.27 (0.58)	0.01	
外国語運用力	2.56 (0.86)	2.47 (0.84)	2.57 (0.79)	0.48	
母国語運用力	3.04 (0.59)	2.97 (0.60)	2.81 (0.61)	3.37 *	1>3
自己主張力	2.78 (0.64)	2.61 (0.65)	2.54 (0.64)	3.32 *	1>3

p*<.05 *p*<.01 ****p*<.001

3-4 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) のクラスター分析

同様に、日本版 ZTPI の標準化した因子得点をクラスター分析 (Ward 法) によって分類した結果、解釈可能性により 4 つの群が抽出された。以下に各群の特徴を示す。

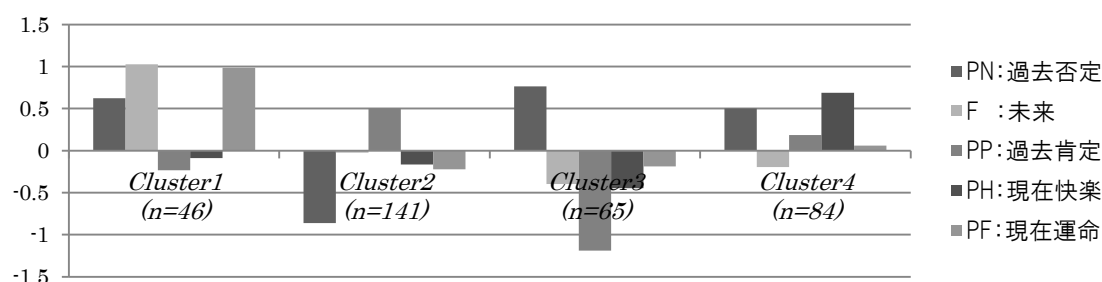


Figure3. 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory(ZTPI)のクラスター分析結果

Cluster1 は過去否定因子・未来因子・現在運命因子の得点が高い、つまり今までの失敗経験から、どうなるかわからない未来の為に今できることをするという特徴から「現在準備群」(*n*=46)とした。Cluster2 は過去否定因子得点が低く過去肯定因子得点が高い、つまり現在や未来より自らの過去へのこだわりや過去に戻りたいという志向が強いという特徴から「過去羨望群」(*n*=141)とした。Cluster3 は過去否定因子得点が高く未来や現在についての因子得点も低い、つまり過去への否定が強く、未来への展望が抱きにくいという特徴から「展望諦観群」(*n*=65)とした。Cluster4 は過去否定因子得点が高く未来、現在快楽因子得点が高い、つまりこれまでの過去を否定しながらも現在に対しては刹那的な刺激を求めるという特徴から「現在刹那群」(*n*=84)とした。

3-5. 日本版 ZTPI による社会人基礎力の検討

現在準備群、過去羨望群、展望諦観群、現在刹那群の 4 群を独立変数とし、社会人基礎力を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、日本版 ZTPI においてもアクション、シンキングに相当する因子において、各群の間に有意な差が見られた。

Table4 日本版 ZTPI と社会人基礎力との関連（多重比較：Tukey 法）

	C1:現在準備群 (n=46:13.69%)	C2:過去羨望群 (n=141:41.96%)	C3:展望諦観群 (n=65:19.35%)	C4:現在刹那群 (n=84:25.00%)	F値 (3,330)	多重比較
アクション	4.20 (0.81)	3.89 (0.74)	3.57 (0.90)	3.72 (0.89)	5.93 ***	1>3・4
シンキング	3.94 (0.72)	3.67 (0.76)	3.48 (0.91)	3.66 (0.83)	3.08 *	1>3
チームワーク	4.25 (0.71)	4.17 (0.67)	3.91 (0.79)	4.08 (0.63)	2.89	

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table5 日本版 ZTPI と社会人基礎力との関連（各因子）（多重比較：Tukey 法）

	C1:現在準備群 (n=46:13.69%)	C2:過去羨望群 (n=141:41.96%)	C3:展望諦観群 (n=65:19.35%)	C4:現在刹那群 (n=84:25.00%)	F値 (3,330)	多重比較
主体性	4.14 (0.92)	3.89 (0.80)	3.61 (1.03)	3.76 (0.90)	3.64 **	1>3
働きかけ力	4.25 (0.84)	3.88 (0.90)	3.47 (1.02)	3.60 (1.00)	7.62 ***	1>3・4
実行力	4.22 (0.89)	3.90 (0.87)	3.62 (1.01)	3.81 (1.05)	3.70 **	1>3
課題発見力	4.01 (0.70)	3.92 (0.77)	3.71 (0.95)	3.90 (0.87)	1.43	
計画力	3.99 (0.92)	3.63 (0.93)	3.45 (1.04)	3.55 (1.05)	3.03 *	1>3
創造力	3.83 (0.89)	3.45 (0.98)	3.27 (0.97)	3.53 (1.04)	3.04 *	1>3
発信力	4.14 (0.85)	3.88 (0.87)	3.48 (0.96)	3.85 (0.80)	5.66 ***	1・2>3
傾聴力	4.26 (0.78)	4.16 (0.85)	3.89 (0.94)	4.16 (0.79)	2.25	
柔軟性	4.35 (0.87)	4.19 (0.83)	4.00 (1.06)	4.17 (0.88)	1.40	
状況把握力	4.27 (0.87)	4.06 (0.80)	3.85 (1.11)	3.95 (0.94)	2.15	
規律性	4.54 (0.91)	4.59 (0.86)	4.46 (0.90)	4.59 (0.93)	0.35	
ストレスコントロール力	3.93 (1.05)	4.12 (0.94)	3.71 (1.16)	3.90 (1.06)	2.53 *	2>3

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

また、社会人基礎力の大大項目であるアクション、シンキング、チームワークの3領域を構成する項目12因子を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、主体性、働きかけ力、実行力、計画力、創造力、発信力、ストレスコントロール力の因子において、他の群に比べて現在準備群が社会人基礎力に関する得点が有意に高かった。

3-6. 日本版 ZTPI による大学生の汎用的技能（Generic Skills）の検討

クラスター分析によって抽出された、現在準備群、過去羨望群、展望諦観群、現在刹那群の4群を独立変数とし、大学生の汎用的技能を従属変数とした一元配置の分散分析を行った。その結果、社会的関係形成力、持続的学習・社会参画力、知識の体系的理解、外国語運用力、自己主張力において過去羨望群、展望諦観群、現在刹那群に比べて現在準備群が有意に得点が高かった。

Table6 日本版 ZTPI と汎用的技能（Generic Skills）との関連（多重比較：Tukey 法）

	C1:現在準備群 (n=46:13.69%)	C2:過去羨望群 (n=141:41.96%)	C3:展望諦観群 (n=65:19.35%)	C4:現在刹那群 (n=84:25.00%)	F値 (3,330)	多重比較
批判的思考問題解決力	2.92 (0.52)	2.82 (0.45)	2.73 (0.49)	2.80 (0.44)	1.46	
社会的関係形成力	3.27 (0.44)	3.18 (0.45)	2.91 (0.52)	3.14 (0.44)	6.85 ***	1・2・4>3
持続的学習社会参画力	2.99 (0.49)	2.81 (0.55)	2.60 (0.57)	2.75 (0.56)	4.79 ***	1>3
知識の体系的理解力	2.80 (0.46)	2.62 (0.54)	2.45 (0.61)	2.64 (0.48)	4.07 **	1>3
情報リテラシー	3.30 (0.53)	3.22 (0.57)	3.24 (0.69)	3.34 (0.62)	0.70	
外国語運用力	2.92 (0.67)	2.56 (0.85)	2.39 (0.85)	2.40 (0.81)	4.85 ***	1>2・3・4
母国語運用力	3.00 (0.53)	2.98 (0.59)	2.89 (0.59)	2.87 (0.68)	0.84	
自己主張力	2.92 (0.63)	2.68 (0.63)	2.38 (0.70)	2.65 (0.61)	6.78 ***	1・2・4>3

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

4. 考察

4-1. 2つの時間的展望尺度の差異

本研究で使用した時間的展望体験尺度と日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) という 2 つの尺度はどちらも時間的展望を測定する尺度でありながらも、下島ら (2011) も指摘するようにその性質は若干異なっている。過去の側面については時間的展望体験尺度が自らの過去を受容できるかを測定しているのに対し、日本版 ZTPI においては過去の肯定／否定が問題とされている。現在の側面については時間的展望体験尺度が現在の満足度を測定しているのに対し、日本版 ZTPI においては「人生に刺激は重要だ」といった項目にみられるように現在における快楽への優先度が問題とされている。未来の側面については時間的展望体験尺度が「私には将来の目標がある」といった項目にみられるように目標の有無や目標への態度を重視しているのに対し、日本版 ZTPI においては「コツコツと取り組んで時間通りに課題を終了する」といった項目にみられるように計画性を問題としている。その為、本研究では時間的展望体験尺度と日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) という 2 つの尺度を使うことにより、大学生の時間的展望をより詳細に検討することができた。

クラスター分析における因子得点分布によると、時間的展望体験尺度における現状不満足群と日本版 ZTPI における現在準備群は現在に対する満足度は低いものの、未来に対しての指向は高いという点で類似した特徴を示している。これらの群は希望の持てない現代社会の中でも自らの将来目標に向かって努力している一方、その過程である現在には満足することは出来ないといった学生たちが相当するだろう。また、時間的展望体験尺度における展望停滞群と日本版 ZTPI における展望諦観群も過去・現在・未来それぞれに対する展望が低いという点で共通していると言えよう。これらの群は、過去に対してもポジティブな印象をもつことができず、一方で将来に対してもやりたいことを決められず、希望を持つこともできていない学生たちが相当するだろう。最後に、時間的展望体験尺度における楽観展望群と日本版 ZTPI における現在刹那群は、現在刹那群が未来への指向が低いという特徴をもつものの、現在という時間を重視しているという点での類似性は認められる。これらの群は、古市 (2011) が指摘する漠然とした未来より現在における楽しみを重視する学生たちが相当するだろう。

4-2. 時間的展望から見た大学生の社会人基礎力尺度の検討

社会人基礎力における 3 領域（アクション・シンキング・チームワーク）においては、時間的展望体験尺度と日本版 ZTPI の両尺度共にアクションとシンキングにおいて、時間的展望体験尺度の現状不満足群と日本版 ZTPI における現在準備群という類似した群が、他の群に比べて有意に得点が高かった。特に、アクションを構成する主体性、働きかけ力、実行力因子は日本版 ZTPI において大きな差が見られたのに対し、シンキングを構成する課題発見力、計画力、創造力においては時間的展望体験尺度において大きな差が見られた。一

方で、チームワークにおいては時間的展望体験尺度、日本版 ZTPI の両尺度においても群間に有意な差は見られなかった。未来を重視する時間的展望体験尺度、過去を重視する日本版 ZTPI という特徴を踏まえると、主体性、働きかけ力、実行力から構成されるアクションは日本版 ZTPI における過去の肯定といった、学生のそれまでの経験などの過去の側面との関連が重要であり、課題発見力、計画力、創造力から構成されるシンキングは時間的展望体験尺度における目標指向性といった、大学卒業後の目標などの未来の側面との関連の重要性が推察される。

また、大学生の汎用的技能 (Generic Skills) においては、2 つの時間的展望尺度の差異、つまり大学生たちの時間的展望のタイプによって、身につけている汎用的技能に差が見られた。群間差としては、社会人基礎力尺度における結果と同様に、大学生の汎用的技能 (Generic Skills) 尺度においても、時間的展望体験尺度における現状不満足群と日本版 ZTPI における現在準備群が他の群に比べ、様々な因子において得点が高かった。時間的展望体験尺度においては特に、批判的思考・問題解決力、持続的学習・社会参画力、母国語運用力、自己主張力因子において群間で差が見られたのに対し、日本版 ZTPI においては社会的関係形成力、持続的学習・社会参画力、知識の体系的理解力、外国語運用力、自己主張力において群間に差が見られた。

また、時間的展望体験尺度における停滞展望群、楽観展望群、日本版 ZTPI における展望諦観群、現在刹那群はそれぞれ、先述のように過去や未来への展望が描けなかったり、あるいは現在に快楽を求め将来に関しては楽観的であったりする学生たちである。本研究の結果からは、それらのどちらも群も現在不満足群や現在準備群と比べると、社会人基礎力が相対的に低いことが明らかとなった。Boniwell & Zimbardo(2004)は *Balanced Time Perspective* という概念を提案し、単純に将来に対して楽観的に希望をもつよりも、*well-being* にとっては、中程度から高程度の未来、現在快楽、過去肯定と低い過去否定、現在運命が望ましいとしている。

4-3. まとめと今後の課題

本研究においては、時間的展望研究の視点から大学生の社会人基礎力を検討した。先述のように、現代社会においては、本研究で使用した社会人基礎力を始めとして、大学生の様々な側面が“数値化”され、“測定”され、“可視化”されている。本田 (2006) は、こうした大学生たちに求められる様々な「力」なるものを「ハイパー・メリトクラシー」と名づけ、現代社会における若者を取り巻く状況を批判的に検討している。当然ながら、様々な測度による単純な評価は、安易な特性論や個体能力論に陥る危険性を有している。

今後の課題としては、そうした“数値化・可視化”の危険性を自覚しつつ、本研究で見られたような、様々な時間的展望を抱く学生たちを、どのように教育していくのかという点があげられる。その際には、単純に“数値化”されたデータではなく、一人一人の学生たちの顔を見、彼らとの対話の中で、彼らの時間的展望を育てていく必要がある。

資料

時間的展望体験尺度(白井、1994)	
第1因子：目標指向性	私には、だいたいの将来目標がある
	将来のことを考えて今から準備していることがある
	私には、将来の目標がある
	私の将来は漠然としていてつかみどころがない
	将来のことはあまり考えたくない
第2因子：希望	私の将来には、希望ももてる
	10年後、私はどうなっているのかよくわからない
	自分の将来は自分でできひらく自信がある
第3因子：現在の充実感	私には未来がないような気がする
	毎日の生活が充実している
	今の生活に満足している
	毎日が同じことのくり返しで退屈だ
	毎日がなんとなく過ぎていく
第4因子：過去受容	今の自分は本当の自分ではないような気がする
	私は、自分の過去を受け入れることができる
	過去のことはいまだに思い出したくない
	私の過去はつらいことばかりだった
	私は過去の出来事にこだわっている

日本版Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) (下島ら、2007)	
第1因子：PN(Past Negative)：過去否定	過去に起きた嫌な出来事について考え
	過去のつらい経験が、繰り返し頭に浮かぶ
	若い頃の嫌なイメージを忘れることは難しい
	人生の中で、ああすべきだったのに、と思うことが多い
	取り消して、まいたい間違いを過去に犯したことがある
	今を楽しんでいるときでも、つい過去のよく似た経験と比べてしまう
	人生の中でやりそこなった楽しいことについて考えることがある
	私の決断は、周りの人や出来事によって大いに影響される
第2因子：F(Future)：未来	コツコツと取り組んで時間通りに課題を終了する
	やるべきことがあるとき、誘惑に耐えることができる
	毎日を計画するというよりは成り行きで過ごす
	何かをやり遂げようとするとき、目標を決めてそれに到達するための
	討する
	夜遊びに行くことよりも、明日までにやるべきことや必要なことを終え
	友人や上司・教師などにに対する義務は遅れずに果たす
	前進するためならば、難しくておもしろくない課題に取り組むことが
	人は毎朝、その日の予定を計画するべきだと思う
	約束の時間に遅れるのは嫌いだ
第3因子：PP(Past Positive)：過去肯定	やるべきことをリストにする
	稼いだお金は、明日のために貯金するよりも今日の楽しみに使う
	決断する前に、メリットとデメリットを比べてみる
	昔のことを考えるのは楽しい
	昔のことを思い出すと、悪い思い出よりも良い思い出の方が全体的に
	嫌な思い出が多いので、過去のことは思い出したくない
	楽しかった思い出が、すぐに心に浮かぶ
	若い頃が懐かしいと思う
	何度も繰り返される家族の行事や伝統が好きだ
第4因子：PH(Present Headonistic)：現在快楽	過去に虐待や拒絶をそれなりに経験した
	家族が昔はあであった、こうだった、と話しても耳を貸さない
	懐かしい光景、音、匂いによって、若い頃のよい思い出がよみがえる
	人生の刺激を得るために冒険をする
	人生に刺激は重要だ
	危険をおそれないからこそ、人生は退屈でなくなる
	時間内に終えることよりも、やっていることを楽しむことの方が大切な
	自分の頭ではなく気持ちに従うことが多い
	衝動的に行動することがある
第5因子：PF(Present Fatalistic)：現在運命	人生のゴールだけを考えるよりも、その道のりを楽しむことが大切な
	親密な関係は情熱的な方がいい
	人生の進路は、自分ではどうしようもない力によって決められている
	なるようにしかならないので、自分が何をしていてもあまり関係ない
	私の人生は運命によって定められるところが多い
	どうしようもないことなので、将来について心配しても仕方がない
	物事は変わるので、将来の計画を立てるのは実際には不可能だ
	成功は努力よりも運で決まることが多い

社会人基礎力尺度(北島ら、2011)	
ア ク シ ョ ン	主 体 性
	グループでの取り組みで、自分の役割は何かを見極めてい
	困難なことでも自分の強みを生かして取り組んでいる
	自分の役割や課題に対して自発的・自律的に行動してい
	メンバーの協力を得るために、協力の必要性や目的を伝え
シ ン キ ン グ	働 き かけ
	状況に応じて効果的な協力を得るために、様々な手段をい
	グループの目標を達成するために積極的にメンバーに働い
	目標達成に向かって粘り強く取り組み続けている
	とにかくやってみようとする果敢さを持って課題に取り組ん
チ ー ム ワ ー ク	実 行 力
	困難な状況から逃げずに目標に向かって取り組み続ける
	課題発見
	目標達成のために現段階での課題を的確に把握している
	計 画 力
	現状を正しく認識するための情報収集や分析をしている
	課題を明らかにするために、他者の意見を積極的に求め
	目標達成までのプロセスを明確化し、実現性の高い計画を
	目標達成までの計画と実際の進み具合の違いに留意して
	創 造 力
	計画の進み具合や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を
	複数のもの・考え方・技術等を組み合わせ、新しいものを
	従来の常識や発想を転換し、新しいものや解決策を作り出
	目標達成を意識し、新しいものを生み出すためのヒントを
	発 信 力
	グループでの取り組みで、メンバーに情報をわかりやすく
	メンバーがどのような情報を求めているかを理解して伝え
	話そうとすることを自分なりに理解したうえでメンバーに伝
	内容の確認や質問等を行いながら、メンバーの意見を理
	傾 聴 力
	相槌や共感等により、メンバーに話しやすい状況を作
	先入観や思い込みをせずに、メンバーの話を聞いている
	自分の意見を持ちながら、メンバーの意見も共感を持って
	なぜそのように考えるのか、メンバーの気持ちになっ
	柔 軟 性
	立場の異なるメンバーの背景や事情を理解している
	立場から期待されている自分の役割を把握して、行動して
	周囲から期待されることを他のメンバーができることを判断して行
	自分ができること、他のメンバーができることを判断して行
	状 況 把 握
	周囲の人間関係や忙しさを把握し、状況に配慮した行動を
	メンバーに迷惑をかけないように、ルールや約束・マナー
	メンバーに迷惑をかけたとき、適切な事後の対応をしてい
	規律や礼儀が求められる場面では、礼節を守ったふるま
	規 律 性
	グループでの取り組みでストレスを感じる時、その原因に
	ストレス
	人に相談したり、支援を受けたりして、ストレスを緩和して
	コン
	力
	ストレスを感じても、考え方を切り替え、コントロールして

大学生の汎用的技能(Generic Skills)尺度(山田ら、2010)	
第1因子：批判的思考・問題解決力	自分で発見した問題点や課題を解決する力
	新たな問題に直面したときに、創造的に問題を解決する力
	現状を分析し問題点や課題を明らかにする力
	ものごとを批判的・多面的に考える力
	新しい発想や価値を生み出す力
第2因子：社会的関係形成力	他人の意見に根拠のある批判をする力
	他人との関係を作り、維持する力
	他人と協調・協働して行動すること
	相手の意見を丁寧に聞く力
	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
第3因子：持続的学習・社会参画力	意見の違いや立場の違いを理解する力
	社会の規範やルールに従って行動すること
第4因子：知識の体系的	常に新しい知識・能力を身につけようとする態度
	卒業後も自律・自立して学習すること
	様々な物事に積極的に取り組む力
	これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用する力
	社会の発展の為に積極的に関与すること
第5因子：情報リテラシー	社会の一員としての意識を持つこと
第6因子：外国語運用力	自然や環境に関する知識の体系的な理解
	自然や社会的自称について、科学的・数量的に分析・理解する力
	社会に関する知識の体系的な理解
	幅広い一般常識に関する知識
	多文化・異文化に関する知識の体系的な理解
第7因子：母国語運用力	コンピュータを使って文章や資料を作成する力
	インターネットを使って必要な情報を収集する力
	情報や知識を論理的に分析する力
	多様な情報を適正に判断し、効果的に活用する力
第8因子：自己主張力	特定の外国語で聞き、話す力
	特定の外国語で読み、書く力
第9因子：自己主張力	社会生活において母語(日本語等)で円滑に聞き、話す力
	社会生活において母語(日本語等)で読み、書く力
第10因子：自己主張力	自分の意見を筋道立てて主張できる力
	自分の意見を相手にわかりやすく伝える力
	集団の中でリーダーシップを発揮する力
	自分に自信や肯定感を持つこと

引用文献

- 青木康太朗 粥川道子 杉岡品子 2012 キャンプ体験が大学生の社会人基礎力の育成に及ぼす効果に関する研究, 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, **3**, 27-39.
- 浅野智彦編 2006 検証・若者の変貌—失われた10年の後に, 勁草書房.
- Boniwell, I., & Zimbardo, P. G. 2004 Balancing time perspective in pursuit of optimal functioning. In P. A. Linley & S. Joseph (Eds.), *Positive psychology in practice*. Hoboken, NJ: Wiley. pp. 165-178.
- 築山泰典 神野賢治 田中忠道 2008 大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討, 福岡大学スポーツ科学研究, **39**, 13-26.
- 古市憲寿 2011 絶望の国の幸福な若者たち, 講談社.
- 花田朋美 山岡義卓 白井篤 2012 自主参加型の地域連携プロジェクトによる大学生の学習効果—社会人基礎力評価からの考察—, 東京家政学院大学紀要, **52**, 159-169.
- 本田由紀 2005 多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで, NTT 出版.
- 北島洋子 細田泰子 星和美 2011 看護系大学生の社会人基礎力の構成要素と属性による相違の検討, 大阪府立大学看護学部紀要, **17**, 13-23.
- 北岡康夫 森勇介 根岸和政 2008 産学連携による社会人基礎力の育成: 「Internship on Campus」による社会人基礎力の育成(20), 工学・工業教育研究講演会講演論文集, 平成20年度, 738-739.
- 経済産業省 2006 社会人基礎力に関する研究会-中間とりまとめ-, <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/torimatome.htm>.
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science: Selected theoretical papers*. New York: Harper & Brothers. (猪俣佐登留訳, 社会科学における場の理論, 誠信書房, 1974).
- 真島貞幸 2012 「映像制作実習」による社会人基礎力の開発, メディアと情報資源, **19**, 23-33.
- 文部科学省 2004 キャリア教育推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書-児童生徒の一人ひとりの労働観・職業観を育てるために-.
- 文部科学省 2008 「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について〜知の循環型社会の構築を目指して〜 (中央教育審議会答申)」.
- 長屋幸世 足立清人 佐古田真紀子 南健悟 2012 法律学教育における法律討論会の効用と社会人基礎力の関係, 北星学園大学経済学部北星論集, **52**, 53-88.
- 日本経済団体連合会 2004 21世紀を生き抜く次世代育成のための提言—「多様性」「競争」「評価」を基本にさらなる改革の推進を—.
- 西道実 2009 小・中学校におけるキャリア教育プログラムの効果測定, プール学院大学研究紀要, **49**, 193-207.
- 大石郁美 岡本祐子 2010 青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連, 広島大

- 学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **8**, 43-53.
- 奥田雄一郎 2009 大学生の時間的展望を育てる教育実践(1)―時間的展望に対する他者との談話の影響に着目して―, 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, **18**, 68-69.
- 奥田雄一郎 2010 大学生の時間的展望を育てる教育実践(2)―大学生の“普通”に働きかける試み―, 日本発達心理学会第21回大会発表論文集, 478.
- 奥田雄一郎 2011a 大学生の時間的展望を育てる教育実践(3)―下級生を媒介として生成される未来―, 日本発達心理学会第22回大会発表論文集, 381.
- 奥田雄一郎 2011b 未来という不在をめぐるディスコミュニケーション, 山本登志哉, 高木光太郎編 ディスコミュニケーションの心理学:ズレを生きる私たち, 東京大学出版会.
- 奥田雄一郎 2012 心理学からみた我が国のラーニング・コモンズにおける学びの動向と今後の課題, 共愛学園前橋国際大学論集, **12**, 91-103.
- 奥田雄一郎 2013 大学生の時間的展望の時代的変遷 ―若者は未来を描けなかったのか?, 共愛学園前橋国際大学論集, **13**, 1-12.
- 太田悠介 高中公男 2011 インターンシップ体験による社会人基礎力向上への寄与: 芝浦工業大学大学院工学マネジメント研究科におけるインターンシップの効果分析, 経営行動科学学会年次大会: 発表論文集, **14**, 147-152.
- 太田悠介 高中公男 2012 インターンシップ体験による社会人基礎力向上への寄与: 芝浦工業大学大学院工学マネジメント研究科におけるインターンシップの効果分析(19), 工学教育研究講演会講演論文集 平成24年度, **60**, 550-551.
- 下島裕美 佐藤浩一 越智啓太 2012 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) の因子構造の検討, パーソナリティ研究, **21**, 74-83.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究, 心理学研究, **65**, 54-60.
- 白井利明 1995 時間的展望と動機づけ―未来が行動を動機づけるのか―, 心理学評論, **38**, 194-213.
- 手嶋尚人 2013 造形表現の社会人基礎力に与える可能性について: 空間デザインのグループワーク活動を通して, 東京家政大学研究紀要 人文社会科学, **53**, 75-84.
- 都筑学 1993 大学生における自我同一性と時間的展望, 教育心理学研究, **41**, 40-48.
- 都筑学 白井利明(編) 2007 時間的展望研究ガイドブック, ナカニシヤ出版.
- 宇野常寛 濱野智史 2012 希望論: 2010年代の文化と社会, NHK ブックス.
- 山田昌弘 2004 希望格差社会―「負け組」の絶望感が日本を引き裂く―, 筑摩書房.
- 山田剛史 森朋子 2010 学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割, 日本教育工学会論文誌, **34**, 13-21.
- 頭師暢秀 2010 商品開発による社会人基礎力の育成, 流通科学大学教育高度化推進センター紀要, **6**, 71-76

Abstract

The Relationship Between Time Perspective and the Basic Ability to Work in Society of Undergraduate Students

OKUDA Yuichiro

Time perspective is defined as “the totality of the individual's views of his psychological future and his psychological past existing at a given time.”(Lewin,1951). The purpose of this study was to clarify relation between time perspective and the Social Basic Ability to Work of Undergraduate Students.

Method

In this study, participants were 357 1-4th grade college students. They were administered the following four questionnaires: 1) Time perspective experience scale (Shirai,1994), composed of 18 questions concerning Goal Orientation, Hope, Present Fulfillment Sentiment, and Attitude for Past. 2) Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI: Japanese version) (Shimajima, et al., 2012), composed of 43 questions concerning Past Negative, Future, Past Positive, Present Headonistic, and Present Fatalistic . 3) Scale of Social Basic Ability to Work (Kitajima,2011), composed of 36 questions about “Action”, “Thinking”, “Teamwork”. 4) Generic Skills of University Students Scale (Yamada & Mori, 2010), composed 35 questions concerning Critical Thinking/Problem Solving, Social Skills, Sustainable Learning/Social Involvement, Knowledge Systematization, Information Literacy, Foreign Language Skills, Native Language Skills, Self-presentation.

Result

The main results were as follows. Time perspective experience scale was divided 3 clusters. Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI: Japanese version) was classified into 4 clusters. Present Unsatisfactory Group and Present Preparation group show higher point of the Basic Ability to Work in Society than other groups.